
東方停滞緑

ああ素晴らしきかな人生は

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方停滞録

【Nコード】

N9103X

【作者名】

ああ素晴らしきかな人生は

【あらすじ】

目が覚めたら赤ん坊になって森に放置されていた
というか森で産まれた
いやいや森から産まれた？
兎に角、赤ん坊で森に居たのだ
そんなんでも生き残れるか？
普通は無理です
でも生き残れた
だって、妖怪だったから

そんな感じで生きていく転生野郎の物語

自己満足というより事故満足です

めだか箱ふうに言うなら事故満足「クランベリーパニック」あっす
ペカになっちゃった

ノリと勢いで書いてますので、気に入らなければ回れ右でおねがい
します

起きたら石器……え？

あれ？

俺は何で地面に横になってる？

何で俺は裸なんだ？

つうか何で赤ん坊？

「解せぬ……あ、喋れた！」

赤ん坊だから喋れないかと思っただら楽に喋れた。

いや助かった。

もし喋れなかつたら人に助けを求めるのも難しかった。

さて、根本的な解決になってないな。

順番に考えよう。

先ず何故森に来たのか……覚えてない、というかボロいアパートで寝てたぞ俺は？

次、何故に赤ん坊？……うん、解らん、解ったのは腕を見た限り完全に赤ん坊だ。成る程。

次に何で裸なのか……捨て子でも服ぐらい着せるだろ、捨てられた記憶もないが。

結論、知るかボケエ！

……

ええ？！どどどどうしよう！？

冷静に事故分析してる場合じゃないじゃないか！

下手したら死ぬぞ！？

洒落か？洒落なのか？

最近のドツキりはこんなに凝ってるのか？！電脳空間で赤ん坊を疑似体験か？！

流石技術大国日本！！

ハード（資源）が無いからってソフト（技術）を磨いた国は一味違うね！

オーケイ、オーライ、落ち着こう。

冷静になれ、冷静になってる場合じゃないが一先ず落ち着け。
冷静に考えたらあれだ。

夢だ。

胡蝶の夢って知ってるか？

今までの自分は胡蝶が見ている夢の登場人物じゃないのか、という
考えだな。

つまり、今までの衣山奉二という男は、今の赤ん坊が見ていた夢だ
と考えるんだ。

……無理があるな。

赤ん坊が考えるん夢にしては複雑過ぎる。

後は何とか生き抜くだけだ。

まあそれが難しいんだが。

それでも生き抜く、泥だらけになっても負けずに生き抜く。

そして人に会いに行く……

泣きたい。

実は俺は未来人的な異世界人だ。

どっちか解らないのは、俺が妖怪という謎の存在に産まれたのに人
に会った事が無いからだ。

先ず何故妖怪と解るかだが……本能で悟った。

というか産まれてオタオタしてる内に気付いた。

ああ、成る程、妖怪だったな。

んでもってそうなると問題なのは人間だ。

何せ妖怪というのは転じて変じる化生の類。

自然物から産まれた妖怪は【自然災害を恐れる心】から生まれ、動
物から産まれた妖怪は【闇を恐れる恐怖】が畜生に影響を与えず
る。

何で知ってるのか？

本能でとしか言えない。

いやはや人間は自分達の誕生の起源を何千年もかけて知ったのに、妖怪は産まれた瞬間に知っている。

まあ当たり前だ。

恐怖が無くなれば死ぬのだから、知らなかったら生き残れない。本能では人喰いたいと言ってるし。

やめろ、俺は食いたくない。

脳内では理性としのぎをけずってる。

理性頑張り、自制心を援軍に回すから。

しかしここで本能軍にも援軍、空腹がやって来た。

つまりは腹が鳴った。

……まあ喰うにしろ喰わないにしろ、兎に角人を探さなきゃ話しに
ならん。

と言うわけで、人を探しに行ってみる。

俺は地面に書いた遺書を踏みつけあるきだす。

目指すは人との会話だ。

そして時は流れて百年から二百年くらい後……？

いや、五百年はたったかな？

……まさか千年は無いだろう。

まあ兎に角、長い年月をかけて人里らしき何かを発見した。

藁の家に会話が成立してるか怪しい人達。

集落とおぼしき何かは柵と呼ぶにも御粗末な木の棒きれに囲まれて存在していた。

住民の手には石器、かなあ？

多分石器と思われる武器が握られている。

「…………駄目だ、会話出来そうにも無いや」

諦めよう。

最近根城にしはじめた洞窟に戻る。

ゴツゴツした岩が気持ち良いのだ。

「五百年は御預けか……俺生きてるかなあ」

何だか無性に寂しくなってきた。

途中で捕まえた鹿を引き摺りながら不安になって泣きそうになる。

ああ、因みに最近成長が止まった。

少女だ。

赤い長髪に青いつり目の美少女。

完全に余談だが、最初の赤ん坊の頃よりはマシだ。

でも成長したい。

難儀だなあ。

とか考えてたら目の前に兔が現れた。

何故か最近俺の視界に入った奴が急に止まる。

まあ捕まえやすいから良いんだけどね。

取敢えず兔も捕まえて歩きだす。

洞窟に帰って腹を膨らましたら五百年ぐらい寝て凄そう。

時間は腐る程にあるんだから。

そう思ってたら洞窟に付いた。

腹を膨らまし大岩で戸締まりをしとく。

泥棒に入られたら面倒だ。

そして光の入らない空間でちょっと五百年眠る事にした。

起きたら石器……え？（後書き）

どうも

初ではないのですが拙い文章にお付き合いいただき有り難う御座います

完全に見切り発車なのでプロットも何もありませんでしたがそれでも見放さ無いでくださる方は有り難う御座います

今回は主人公の名前と一つの時代かだけ

衣山奉二「きぬやまほうじ」

石器時代に産まれましたが

史実の石器時代より更に前の時代になっております

所謂神代の時代

神祕が具現していた時代ですねぇ

邪馬台国とかが出来るより更に前です

主人公には二つ程能力を与える予定ですが

その片鱗は一応今回出てきましたね

ただ主人公がそれに気付くのは少し後になります

では

次のあとがきでお会いしましょう

五百……年？と死の恐怖のハセゴフンゲフン

世界は理不尽に満ちている。

例えば金持ちが宝くじで二億引き当てるのに対して、貧乏人は一銭も貰えなかったり。

例えば目が合ったからという理由で高校入学から三年間カツアゲされ苛められたり。

例えば今まで必死に生きていたのにいきなり訳の解らない世界で人外にされてたり。

兎に角世界は理不尽がいっぱい、いや、世界とは理不尽の同義語では無かるうか。

そう思える程に、理不尽だ嗚呼理不尽だ理不尽だ。（五・七・五のリズムで）

さて、俺こと衣山奉二が何故こんなに理不尽について考えているかと言えば。

理由は簡単、現在進行形で理不尽な目にあっているからだ。

木々が生い茂る森の中を颯爽と駆け抜ける俺の背後からは宙に浮くスケボーで追い掛けてくる武装した人間……訳が解らん。

だって五百年前までは腰蓑だったんだぜ？ターザンルックでウツホウツホウツキッキーだった人間が、軽く寝ている間に何があった。

もしやあれか、五百年のつもりが三千年くらい寝過ごしたのか。

……有り得そうで怖いわ。

まあ人間を喰ったり脅かしたりしなくても存在を保てる俺なら三千年くらい余裕だがな？

ちなみに俺はコレを元人間だからだと推測している。

とゆうかそれ以外に俺と他の妖怪の差違何て無いのだから。確定的に明らかだろう（ドヤア）

まあ原因は解つても理屈は解らんがな？

最初の百年何かそれが解らず人間食つかで大分迷ったからなあ……

人間見つからなかったけどもさ……

まあ！そのお陰で自分の特異性に気付けたから良かったんだよ！うん、間違いないね。

てゆーかさつきから後ろからレーザーがピュンピュン掠めてるんだよなあ。

「流石にウザったくなくなってきたな……」

俺はうんざりしながら呟いた。

洞窟から抜け出した瞬間に追いかけてこが始まったのだから仕方無いだろ。

しかも五百年前に鹿や熊の骨を繋ぎ合わせて造った『骨人機構ボーンダンガム』が壊されたし。

オッサン怒るよ？少女だけど。

しつこい、ねちっこい、更に言うなら武器が怖い。

お前ら丸腰のオッサンに寄ってたかって、オッサン泣いちゃうぞ？

「右に回り込め！逃がすなあ！」

そんなに張り切らないで逃がしてください。

生まれてこのかた人間を襲った事は無いんだぜ？

まあ今回で人間との遭遇は二回目なんだが、襲っちゃう？初めて（バージン）な殺しちゃう？

……

「やるか……ってうわひゃあ？！」

いいい今日の前を矢が振り返りざざざまにピュンて！ピュンて！

無理です！にげまっ？！

「ギツ!? …… ツウ」

うう……脚がやられた……

俺はみつともなく前のめりに倒れ水溜まりに突っ込み、全身泥だらけになってしまった。

痛い……脚が、右足が燃えるように痛い……

この世界に産まれてから初めて感じる激痛、死の恐怖が心の奥底から這い出て来る。

ズル……ズル……ズル……

人間の理性で押さえ付けていた妖怪の本能も共に這い出ようとする。

「あつ……ああ……ア」

瞬間、世界が止まった。

俺を射殺そうとしていたアシユラ男爵みたいな左右色違いが私のジヤステイスとでも言いたげな、奇抜なファッションの女性も……沢山の兵士も……俺に向かって来ていた光線も……全てが止まっていた。

そんな世界で舞い落ちる木の葉が異様で、殺そうとしてる癖に辛そうに顔を歪める弓矢を構える女性が滑稽で、止まった世界の中で動く物全てがシニールで、優しく頬を撫でる微風にすら嫌悪し。

……俺はたまらず吐き出した。

「おえ……ウツ、うゝうゝ」

でも、とにかく今しか無いというのは解る。

兎に角逃げなきゃ、殺される。

俺は射抜かれた右足を引き摺りながら必死になって森を駆けた。

片足でも、妖怪の身体能力なら十分に走れる。
そして走って走って愚直なまでに走って、世界が動き出したのか、
光線が大地を薙ぎ払う音も無視して走り続け、森を抜けて、俺は絶
望した。

眼下に広がるのは

近未来的な

シエルターに覆われた

『人間（敵）』の文明の集合体……『都市』だったのだから。

五百……年？と死の恐怖のハセゴフンゲフン（後書き）

今回も展開が速いです。

そして主人公は未だ自らの能力に気付いていません

まあ野生動物と雑魚妖怪としか出会った事が無いので仕方が無いと言える……のか？

まあ色々余裕があったり焦ったり絶望したり忙しい主人公ですが、生暖かく見守ってやってください。まる。

親友？ 恩人？ …… 馬鹿で十分？

気付いたら俺は地面に膝をついていた。

俺はこの世界に産まれてから、あまり本気で活動してこなかった。だつて仕方無いだろ？

前の人間の身体では考えられない身体能力に、人間は石器を持つてるだけ。

寿命もかなり長いし、敵になるような強力な妖怪もいなかった。

慢心するには、材料が揃いすぎてる。

いつからか俺は人間を見下し、五百年くらいじゃ追い抜かれない…
…いや、追隨する事すら出来ないと…… 本気で考えていたんだ。

「…… 死にたくない」

ポツリと、小さく溢れた言葉。

それに答えてくれる者などいない。

つまり、味方はいないのだ。

誰も助けてくれないのだ。自らの慢心が、傲慢が、油断が、こんな事態を招いたと言うのに、何て我儘。

未だに他力本願に助けを求める俺は、結局どこまでも人間で、見下していた人間で、妖怪になつても、その薄汚い本性は変わらず。

「死にたくない……」

結局、この結果は必然だつたとしか言えなくて。

自分が全部悪くて、諦めるしか無くて。

嗚呼、この思考もまた何て人間味溢れているんだろう。

人間としてより、妖怪として生きた年数の方が長い癖に、まだ人間を棄てきれない。

いや、言い訳はよそう。

「死にたくないよう……」

静かに涙を流しながら何度も呟く。

俺は最初から人間を捨てようなんてしていなかった。

理性で本能を押さえ付け、この森で産まれてからずっと妖怪の肉体に人間の精神という中途半端な矛盾を抱えて、停滞していた。

そんな脆い状態で留まり続けた。

だから、こんな所で泣き言しか出ない。

だから、誰も助けてはくれない。

だから、五百年も眠ろうとした。

精神の均衡をはかるために。それにすら気づけなかった自分のせい
で……死ぬ。

嗚呼、俺を殺すのは俺何だ。

こんな時ですら、人間を敵にしないために自分を敵にする。

人間としてありたい為に人間を守る思考。

どこまでも醜い。

「死にたくない……」

そのくせ呟く言葉はこればかり、自分で自分を殴り付けたくなる。

だが、この呟きに答える者が現れた。現れてしまった。

「生きたいのか？」

低い、男の声が後ろから聞こえた。

ゆっくりと、確認の為に振り向けば俺達を取り囲むように配置され

た人間の軍勢を睨み付ける、青い着物を着崩した男の背中が俺の目に写った。

「誰……？」

マヌケな質問だと思う。

でも仕方ないだろ？

本当に駄目だと思ったんだ。

助からないって、思ったんだよ。

でもコイツは俺を守るように人間を睨み付け、正義の味方みたいに澄んだ目をしていて。

美化されてるのかもな、俺は場に流されやすい人間だし……でも気になったんだ。

こんな救いようの無い俺を救おうっていう、そんな酔狂な奴に興味が沸いたんだよ。

「誰か……ふむ、この世に再び世を得てから名乗る事も無かったからな……剣の鬼、剣鬼とでも呼べ」

最初は声が小さくて聞き取れなかったが、後はしっかりと聞き取れた。

剣鬼……鬼と言ったのだ。

後ろからではハッキリとは解らないが、良く見れば額から黒髪を押し退けるように刀のような角が生えていた。

鬼、雑魚妖怪の噂で聞いた事があったな、確か剛力にして強靱、妖怪の中でも破格の強さの種族らしい。

剣鬼の正体を聞いて安堵した。助かるかもしれないと、どこまでも事故中心的な思考……本当に嫌になる。

俺がまた暗い気持ちになった時に剣鬼はゆっくりと口を開いて。

「助けるのは良いが……別に目の前の連中を倒してしまっても構わ
んのだろう?」

と言ってきた。

思わず何処の弓兵だとツッコミたくなつたが我慢した。

だいたい相手にその意図は無いだろうし……でも様になるのがムカ
つく。

「……格好付けてないで速く倒せよ」

だからちよつとした意地悪に、刺々しく言ってみる。

勿論本心じゃない、元男としてね?イケメンもげるとオッサンは思
つちやう訳なんですよ。

「格好付けか……ならば期待に答えて我が剣技の真髄を刻ませて貰
おう」剣鬼は苦笑混じりに呟き、次の瞬間には腰に下げている刀を
抜き放ち肩に担ぎ、空いた左腕を前に伸ばした構えでニヒルな笑み
を浮かべながら返事を返してきた。

「行くぞ人間よ、我が武を刻め……秘奥!虚切!」
そらぎり

そして一閃。

右上から左下へ向かう袈裟斬りは小さく空間を歪ませ、人間の持つ
武器を全て破壊した。

「ほう……空を切り抜く我が武をかわすか」

っ!?

違う、一人無事だった。

俺の脚を射抜いた女が冷や汗を溢しながら剣鬼を睨み付ける。

「貴方……何も「退け」……」

はあ！？

折角のチャンスを！

武器を失った人間何か怖くは無いだろ！

何で逃がすんだよ！

そう掴みかかりそうになった。

だけど剣鬼は俺を守ろうとしてくれてるし、俺は人間を敵だと思いたくないんだ。

だから引き下がらなきゃいけない、俺はそう思い伸ばし掛けた腕を引っ込めた。

「見逃してくれるのかしら？優しいのね」

そう言いながら女は流し目で剣鬼に視線を向ける。

……何だるうか、色っぽくて男としてはサービスあざーす！何だが、激しく苛つく仕草だ。

コイツは敵だ。

人間とか関係無い。

「連れにあまり悲惨な光景を見せる訳にもいくまい……退け、三度は言わんぞ」

剣鬼も律儀に返す。

何だその微笑みは、敵を懐柔するつもりか、死ねば良いのに。」

「手厳しいな……」

「あら、嫉妬かしら？」

っ！？

声に出てたのかよ。
てゆーか。

「何が嫉妬だ！何で俺がコイツに惚れてるみたいは何だよ！」

馬鹿なのか！？

俺は元男で、未だに男のプライドぐらいあるわ！

前世がホモだったわけでも……まあ前世はアニメとかぐらいしか覚えてないが。

少なくともノンケだった筈だぞ！

「余り火に油を注がんでくれ……君もそんなにムキになるな、睨むな、歯を剥くな」

コイツ……敵とベタベタしゃがって。

「お前俺の味方じゃねえのかよ！？なら敵と馴れ合つなよ！」

「敵？……少なくとも彼女では敵にもならんよ、悪いがな」

違っただろ！実力の話じゃなくて立場の……ああもう！

「うるせえよ！助けに来たんだろ！？……んっ！」

噛み付かんばかりに怒鳴る、さっさと逃げよう（離れよう）と思い立ち上がるうとしたが右足に激痛が走る。

そっぴや脚をやられてたんだっけか……俺は仕方無く剣鬼に両腕を伸ばし抱っこを要求した。

死ぬ程恥ずかしかったのは言うまでも無い。

「やれやれ……では我々は行くが……追ってこようなどと考えるなよ?」

剣鬼が一応と言っ感じで釘を刺してから、俺を抱き抱えた。
お姫様抱っこで。

「馬鹿か普通に抱っこで良いだろ」
「収まりが悪い」

知るか!

完璧手前の理由じゃねえか!

「では行くぞ」
「俺ははずいん、って話聞けよ!こっ!ばかああああ!」

俺の叫びは走り出した剣鬼の尾を引くように遠ざかる人間達には何時までも聞こえたらしい。

この時、俺は救われたんだ、命だけじゃなくて……心も。

親友？恩人？…馬鹿で十分？（後書き）

何かのフラグが立った……のか？

アシユラなファクションの女性は言わずもがなです。

オリキャラ登場剣鬼

彼は今後のストーリーで大事な役を担って貰います。

鬼なのに剣士……まあ鬼って棍棒も使うし有りかなと、何時も通り
事故完結してやっちまった。

後悔はしていない

ではここまで読んでくれて有り難うございます！

戦いたくない？……善だ

「近々人間の都市を襲うらしいぞ」
「はえ？」

あつ、どうも衣山奉二改め衣山帝姫です。

私たちの新たな縄張りになった山を衣山と命名したり、その妖怪を配下に入れたり忙しく過ごしてる、鍋うまー。

しかもあれだ、口調……無理矢理変えて、剣鬼が「野生児のようではないか、君も淑女として恥ずかしくない態度を志してみたまえ」とか言い出したんだよね。

ハハツふざけんなモゲロと。そういう話だ。

はあ……あつ、そうそうあれから剣鬼は私の配下についてくれたんだけどだね？「君は危なっかしいからな、折角助けた命を昨日の今日で無駄に散らされたくはあるまい、誰だっつてな」とか言い出したんだよ、ハツ父性が溢れてるつもりですかあ？馬鹿め、私はそんな物に騙されないよ。

……あいつは単なる御人好し。

「取敢えず口の周りを拭きたまえ」

おおう、失礼しました。

ふむ……それにしても人間の都市襲撃か。

「死ぬね、大量に」

白菜……みたいな山菜を口に運びながら呟く。

現在妖怪と人間の戦力は拮抗してる、どちらも被害は免れないだろう。

ああヤダヤダ、皆さん恐れを集めないと消えちゃうからって野蠻何だよな。

「ああ……帝姫よ、一つ頼みがあるのだが」

「手伝うよ、剣鬼は御人好しだからね、仕方無い」

まったく、本当に仕方無いね、何だかんだでお世話になってるし、助けられる命は助けたいってのも解るし、本当に私ったら腐った人間根性が抜けないよねえ。

「落ち着け、まだだあくさいどに墮ちそうになっているぞ」

「うん、平気、自己嫌悪は出来るだけしないから」

剣鬼が優しく頭を撫でてくる。

あれ以来私は何だか事ある事に落ち込みやすくなった。というかネガティブになった。

精神が弱いんだよ！！

……ちなみに剣鬼に現代語を教えたのは私だ。我ながら良い仕事をした。

まあ、初めて教えた時にすごいビックリしたって顔をされてその後妙に納得されたけど。

子供のゴッコ遊びに付き合ってお父さん感覚だったのか常に苦笑だった。苦行じゃなかったただけマシだろ？アガペー。まる。

「すまん、迷惑をかける」

「まあ剣鬼は強いからね、能力持ちだし」

これも剣鬼と付き合い初めてから……？……っ？！

つつつ付き合っ！？違っ違っ！？つるむようになってからの意味だ

から！私男だから！

……何を焦ってるんだ私は、落ち着け、素数……は解らないから偶数を数えるんだ。

……いやね？違うよ？見た目が美少女だから皆勘違いするかなって思ってただけで、私は至って冷静だよ？ノーマルだよ？ホントだよ？

「真っ赤になって頭をふったかと思えば真っ青になってうなだれ……君の顔はまるでトマトだな」

うん、トマトは青から赤になるけどね、逆だけどね。

ああ、脱線しちゃったね。

そう、剣鬼とつるんでから知ったのは能力の事なんだけど……

剣鬼の能力はチート臭かったよ。

何せ

【ありとあらゆる空を操る程度の能力】に【刃を扱う程度の能力】らしいからね。

普通は一つしか無いのに、二つある時点で無双確定です本当に有り難う御座いました。

しかもそのうちの【ありとあらゆる空を操る程度の能力】は反則くさい。

空とつく物なら何でも操れる。

例えば、空気とか、とか、空想とか、空豆とか、空間とかは酷いね。まあ個人的には空豆をまいた瞬間に収穫可能になった方が有り難かった。

空間捜査も移動にしか使わないし、空そのものを操るのも日が暑い日に雲をずらして日傘にしたりとかにしか使わない。便利な力だ。

【刃を扱う程度の能力】は包丁使いが半端無かった。ちよつとふつたら魚を捌いたり。

ちょっと動かしたら山菜が切り刻まれたり。
本当に便利だ。

「何故だろうな……自分の存在が一家に一台的な物になっている気がするのよ」

「気のせいじゃない？」

まったく被害妄想も大概にしてよね、やれやれだぜ。
まあそれは良いとしよう。

「ん、手伝うと言っても私は戦わないからね、精々人間の研究施設に潜り込んで薬を持ってくるしか出来ないよ？」

フフンと笑いながら戦力外通告をしてやる。まいったか。
だが剣鬼はやれやれと言いたげに肩の横に手を添えて首をフル。
腹立たしい動作だ。

「そんな事は解っている、君は弱いからだ」

齒に衣着せぬ奴である。

鬼だから嘘は嫌いらしいが……本音は隠せよ、男として悔しいぞ、戦力外は。自分から言っただけだね。

「そもそも君は能力も持つてはいないし、人間とは戦えないだろう」
「むっそりや能力も何も無いけどさ！人間どころか妖怪とも出来るなら闘いたく無いけどさ！それでも私は強いんだよ！？」

これは本当。

まあ剣鬼には勝てない、どころか触る事も出来ずに負けた。
でも他の妖怪には負けた事は無いよ。

こんなんでも八百年からもしかしたら寝過ごして三千年かもしれな
いけど……とにかく長くを生きた大妖怪なんだからねっ！

「だが戦う意思が無ければ弱い、更に危機が迫ると直ぐにパニック
になるだろう」

「うぐう?!」

私の心に千五百のダメージ。

剣鬼は私をもつと劣るべきだ。オッサンは大事に……駄目だ。オッ
サンって何だか抵抗があるな。

これも剣鬼が私の言葉使いを矯正したせいだ。恨むぞ。

「でも、危なくなったら戦うよ、自分の命は大事だからね」

「だから危なくなったらパニックになるだろう?」

……何だろうか、過保護過ぎないかコイツ。

だいたい剣鬼は私の配下なんだから私の言うことを聞けば良いのに。

「ぬっ……熊肉が無くなったな」

……今鍋の話に戻すか?普通。

「私も行くし戦うから……決定だからね!」

「ぬっ、待て早まるな帝姫!」

「待たない!」

私はハツキリと宣言し洞窟を飛び出した。

……あれ?

確か戦いたくないと伝えようとしたよな、自分で戦力外通告したし。
あれ?

「君は自分で戦力にならないと言ったのではなかったか?!」

「五月蠅い!馬鹿!私にだってプライドはあるんだ!」

そう叫び後ろから追ってくる剣鬼に追い付かれないよう速度をあげる。

私の逃げ足は既に世界一、まあ何を規準に世界一なのかは解らないが。

いやいや……何でだろう。

戦いに行くのにワクワクしてるよ……妖怪の本能なのかな……

落ち着け、落ち着け、心に理性を心に理性を。

「まあ、もう引けないけどね」

苦笑しつつ山を抜ける。

眼前に広がる人間の都市を見つめながらほくそ笑み、私は小さく咳いた。

「まあ殴り合いが戦いの全てではないしね、私には私のやり方もあるさ」

生かさず殺さず無力化する。

抵抗を諦める程に、何度も心を折るのだ。

人間の残虐性と脆さは良く知っているよ……だから私は残虐に奴等は脆くあってもらおう。

私の精神衛生上の為にも。

「やっぱり、私は人間で妖怪なんだよね」

苦笑混じりに都市を見下ろす。

その顔に浮かぶ苦笑が歪んだ笑みになるのにも気付かぬまま、決戦の時は近付いていく。
壊れきれなかつた心と共に、止まらずに進もうとする。
山の麓に不気味な笑い声が響いた。

戦いたくない? …… 善だ（後書き）

主人公改名のお知らせ

奉二から帝姫になりました

偉そうな態度から剣鬼が命名しました

いつかこの命名の話しも番外編とかで書こうかなと思います

さて、いつも主人公の話しばかりなので今回は剣鬼の話を

剣鬼のキャラモチーフは頼りになるお兄ちゃんです

だから剣鬼にとっての主人公はあくまで妹

しかも手のかかる妹

帝姫的には年上意識があるのか上に立とうとしますが、微笑ましく

見守られています

頑張れ

ではではここまで読んでくださって有り難う御座います

後二話ぐらいで人妖大戦に行くと思います

修行？拷問？急展開……

私が戦うと宣言した翌日、剣鬼に私の首根っこを掴まれ森の広場に連れてこられた。

真上から降り注ぐ太陽光を遮る樹木の無い切り開かれた此処は、剣鬼が鍛練で刀を振り回した結果出来上がった私配下の雑魚妖怪達の憩いの場だ。安らぎ大事に。

そんな皆の共有スペースから雑魚妖怪を追い出した暴君剣鬼は私を切り株の上に投げ捨て、腰にぶら下げた小太刀を投げ渡してきた。

「ととつ……どしたの？」

危なげなく……本当は危うく落としそうになりながら聞いてみる。

だが剣鬼は無言で刀を抜き、私を睨み付ける。

黒く、冷たいその瞳に思わずゾツとした。

背骨を凍らされたかと錯覚する程に身体から熱が奪われていく。

暑い訳でも無いのに額からは汗が流れ、小さく喉を鳴らす。

怖い。

これが偽らざる本音だ。

強がりすら許されない圧倒的な力量。

今までの訓練がお遊びだと自覚させられる。

気付けば私は切り株に座り込みながら、小太刀を両手で握り締め剣鬼に向けていた。

「っ!？」

それに気付いた瞬間に思わず小太刀を投げ捨てる。

仲間へ武器を向けた嫌悪感と背徳感に小さな悦楽を感じたのか、口からは喘ぐように吐息が漏れた。

「あつ」

小さく、蚊の鳴くような声を自覚した瞬間に頭をグチャグチャにしていく思考。

何で剣鬼が私に刃を、嫌だ、イヤだいやだ、傷付けたくない、でもやらなきゃやられる本気じゃないそんな保証は無い殺される助けてくれた仲間守る敵違う違う剣鬼は大事な仲間で家族でも刀を向けられて怖くて殺されそうで抵抗しなきゃ抵抗は無駄逃げれるか本気の剣鬼に立てない息苦しいそんな事より逃げなきゃ仲間から逃げる必要はでも今は危険剣鬼がこんな事をする筈がない私が上で剣鬼が配下で護られてても戦いたくて……違う！戦いたくなんかない！

頭の中が歪むのに比例して身体がカタカタと震えだす。

頭を抱え身体を丸め剣鬼の視線から逃れようとする。

だが重圧は消えない、殺気が質量を持ったかのように私を押し潰そうとする。

「……解つただろう、君は戦えない」

その言葉と共に重圧は消えた。

一気に楽になつた身体に気が緩み、一瞬気を失いそうになつたが、何とか踏み留まる。

こいつ、私に諦めさせる為だけにこんな事をしたのかと、そんな不満が膨れ上がる。

だが、さつきまで恐怖に縛られていた肉体は未だ筋肉がはりつめ、上手く言葉に出来ない。

無駄と解っていても、乗せられるだけの感情を乗せて剣鬼を睨み付けた。

私は全力で走り出したが剣鬼が私の手首を掴んだ。

ソワッ

貞操の危機を（勝手に）感じて私は剣鬼の腕を振り払った。
来るな！触るな！変態め！

.....

お騒がせしました。

あれから二時間程逃げ回った私は今剣鬼により縛り上げられ木の枝から吊るされてる。

縄がキツくて痛いと言句を言っても、剣鬼はまったく取り合わない。ロリコン扱いが余程腹に据えかねたのか殺気がペチペチと肌を叩く。殺気が刺さるといふ表現は聞くが、今の剣鬼は殺気を押さえてるのかそこまで威圧感はない。

まあ、それでも息苦しいし、ペチペチと叩くと表現は可愛いが実際は刀の腹で叩かれてる感じ？

……威圧感はないけどかなり怖い、漏れそう。

でも負けない！男云々の前に大人として二度も漏らしてたまるか！
一回目？……聞くなよ。

まあとにかく今私はお仕置き中な訳だが、さつきから風に煽られて身体がグルグル回って気持ち悪い、端的に言うならば酔った。端的に言わなくても酔った。

「剣鬼いきもちわる……うぷっ」

うう、限界だ……

なのに剣鬼は無視を決め込む！どころか殺気が増した！

あわわ！余計身体がグルグル……やめれええ！

「きゅっ……」

そして私は目を回した。

吐き気も更に上がりました。解放されたら剣鬼の角に水をかけるんだ。

錆びれば良いのに、死亡フラグ？

大丈夫、自分で認識して建てたフラグは大抵デコイだから！

「おろっ……マジ……もっ、むり」

頭では色々考えてるが、実際喋ると言い切る前に吐き気が、何だこの拷問。

私が何をした。家事も狩りも何もしていないぞ。

えっ？それも問題？

良いんだよ私はなんちゃって美少女だから。

男子は家事をしないし、美少女は狩りをしない。

何てご都合主義！……あれ？何か違う？

っていうかマジもう無理だ！私のライフは0よ！

「限界か……まあここまで殺気に耐えたのなら成長はしているな」

煩えよ！今吐きそうなのは殺気じゃなくて回転が原因だよ！気付けよ！

そう叫びたいのに口許を覆う手を話せず睨み付けるだけに留める。

速く遠くに行かなきゃ、剣鬼に醜態を見られる。
それは嫌だ。

私は直ぐ様立ち上がり河原にしゃがみこみ、今まで耐えていた物を
一気に吐き出した。

「ウグツ……はあ、何とか相棒として情けない姿は晒さずにするだ
な」

そのままドカリと座り込む。

空を仰ぎ見れば真っ白な雲がゆつくりと風に流れ、何とも穏やかな

『キイーン』機械音が……は？

なにあれ！？戦闘機！？人間！？

「……隠れなきゃ！」

私は慌てて木の影に身を隠した。

遠くからでかい妖気が近付いてくる。剣鬼だ。

私のチキンっぷりは気配察知能力を異常に上達させた。

気付かれる前に逃げられるからね。

それが剣鬼ともなれば一発で解る。相棒スキルだ。

「帝姫！……無事か！？」

余程焦っていたのかかなりの汗をかいていた。

まあフラフラ離れた私が向かった先から機械音が聞こえれば焦るか。

「うん、あんがと」

と言いながら然り気無く剣鬼の後ろに隠れる。

剣鬼がその気になれば【空】を翔ぶ戦闘機は相手にならない。

むしろ相性最悪だ。

……まあ剣鬼とならだがな。

「はっ？」

戦闘機が雲に向かってレーザー？的な何かを放った瞬間、ポフツという効果音が似合いそうな程に勢い良く人が飛び出してきた。

……違う。あれは人型の妖怪か？

妖気も感じるけど、僅かに靈気も感じる。

意味が解らなかったが……今はとにかくあの人を助けなきゃ。

「剣鬼！君に決めたあ！」

「……何を決めたのかね」

溜め息混じりに前に一歩進み刀に手を添える剣鬼。

そこは「ピツピ チュウ！」と言わなきゃ駄目だろ？まあ解るわけ無いが。

このネタもいつか仕込もう。

「剣技……天航そらわたり」

剣鬼が刀を一閃するとそれだけで斬激が【空】を飛び、戦闘機を切り飛ばした。

「さすがチート！良いバグ具合だね！」

私は剣鬼の背中を思いきり叩き走り出した。

片翼が切り裂かれた戦闘機はきりもみしながら墜落していくのをどうせ脱出すると視界から外し、人間妖怪？に向かい手をふる。

だが戦闘機からパイロットは脱出せず、刹那のチャンスしか無かつただろうに一瞬照準の中に入った妖怪人間？の腹をレーザーが貫い

た。
そして仕事は終わったとばかりにコクピットから椅子が飛び出し、
パラシュートが開く。
脱出まで完璧だった。

「……………は？」

私は思わず脚を止めた。

グラリと傾き、空中でたたらを踏むという器用な事をした後に、私
に手を振り替えそうとしたのだろう、上げかけた手を腹に持ってい
き、一撫で。

それだけの動作を酷く緩慢に行い、気を失った。

「っ……………だめだ！間に合わない！」

私はそこまで来てようやく走り出す。

だが、間に合わない。

動き出すのが遅すぎたのだ。

どうあっても間に合わない。

「急展開はっ……………人生にはいらねえだろがぁ！」

あまりに理不尽な流れ。

あれが人間か妖怪は関係無い、そもそもそこまで思考が追い付か
ない。

身体を鍛える暇も無く、こんな展開に巻き込まれるとは、我ながら
不幸だ。

「でも……………不幸も急展開も……………ない交ぜにして勝利も敗北もごっち
やにして……………私は楽に生きるんだから、誰も死ぬな！」

私の精神安定の為にもなあ！

どんどん加速する。

脚から血が吹き出し風圧で首が折れそうになるが、止まらない。

血が落ちるより速く、ふくらはぎから後ろに線を引きながら走る

それでも直も間に合わない。

だったら全てを置き去りに、全てをひとからく置き去りに。

【あらゆる物がとまる感覚】

それを感じながら、それを維持するのに全神経を使う。

もう少して顔面から地面に突っ込みそうな体勢のまま空中に固定さ

れた少女をみながら必死に力を留める。

……脚を動かすのも辛い。

空間をまるごとめながらゆっくり近付き、少女を抱き抱える。

いつかの剣鬼のように。

そして、世界が目覚めたかのように止まっていた全てがそのままに

動きだし。

私の量腕は少女の落下の衝撃で粉碎骨折させられた。

空間を止めても速度や衝撃は止まるだけらしい、動き出せば全てが
元に戻る。

……不便だ。

修行？拷問？急展開……（後書き）

今回は急展開です

むしろ今回も急展開です

今回主人公が力を意識して使いましたが。

それでも能力としては出てきません。

そして今回助けた少女

剣鬼と同じくらい重要なキーパーソンになる予定です

あくまで「予定」

それ以上も以下も無い

いつも通りグダグダな内容でしたが、ここまで読んでくださり有り難う御座います。

今後はもうちょい成長させたいな、文章力……

訓練！家出？……拉致

どうも衣山帝姫です。

今私は空を飛んでいます。風になってます。ナウシカ！あー。

「はしゃぐなジャリ」

この口が悪いのは戌亥精華さん、この前私が助けた墜落少女だ。助けたお礼に空中浮遊の妖術を教えて貰っています。

うん、現在進行形、実は抱えて貰っています。

口は悪いが面倒見は良い、お前はどこのランサー以下略。

「ちっ……」

舌打ち！？声に出ていましたか！？

いや……声に出たなら問答無用で拳骨が降ってくる。

この精華さんはそーゆー人だ。

剣鬼助けて！

「声にでてんぞ」

ゴズン！

んぬあ！？

ちよっ！頭殴られて出て良い音じゃないよ今の！

普通に陥没するよ！頭頂部が！

何て文句を言える筈も無く、私は精華さんを怨めがましく見つめるしか出来ない。

ああ悲しきは私の非力さよ。

「帝姫、降りてこい、食事の準備が出来たぞ」

下から剣鬼の声が聞こえる。

とゆうか私は自由意思で浮いてる訳ではないのだから、声をかけるなら精華さんにすれば良いのに。

「ああ、悪いな、腹あ減ったぜ」

「ふむ、二人分しか用意してないのだがね、悪いが君は遠慮してくれ」

「だってよ、悪いなジャリ、遠慮してくれ」

「この流れで私!？」

理不尽だ!……ごめんなさい、謝ります。だから睨まないで。

ああ何てチキンハート、おお帝姫よ目を逸らしてしまうとは情けない……グスン。

「泣くな……まさかあそこまで暴虐とはな」

剣鬼が肩の横に手を置きながら首をふる。お手上げ侍ですかそうですか。テレッテッ帝姫が空腹あーっぶ。

「……私のを分けてやる」

有り難う剣鬼、あとさっきから我慢してたんだけどさ。突っ込むよ?

「何ナチュラルに浮いてるのかな!?空を操った?ああなるほどね!つまりは空を飛べない私へのあてつけだよね!二人して!」

然り気無く浮いて近づいてくんなよ!

私は精華さんの助力無くして風になれないと言うのに、くちおしや。

「そうカツカすんなよ、ジャリもいつかきつと飛べるさ、多分な」

精華さんが慰めてくれる、が。

いつかとかきつととか多分とか不安でしようがないけど有り難う。

あとね精華さん。

「私の名前は帝姫！て！い！き！衣山帝姫だつてば！ジャリじゃない！」

「はっ、名前なんざ個を現す記号みてえなもんだろ？だつたらジャリでお前だと解るなら別にジャリでもだなあ「騙されないよ！そんな何となく理屈が通ってそうで限り無く論点からずれた話しには騙されない！」「だが、ジャリはジャリだ」

んぬぐあ！

ぐぐぐ、だつたらこっちにだつて考えがあるからね！？

「だつたら精華さんは今日からオニヤンコタンだ！ざまーみるオニヤンコタン！」

「自由」

ぐはあっ！

これが大人の余裕なのか？

精華さんは涼しい顔をしながらニヤニヤ此方を見てくる。うう。

「うわああん！もう知らないよ精華さん改めオニヤンコタンの馬鹿ああ！耳からミミズ出しながら鼻唄でも歌ってるー！」

「まで！良く解らん呪詛の言葉を吐きながら逃げ出すな！」

上から剣鬼の突っ込みが聞こえるが知るものか。
いつか名前で呼ばせてやる。

そして二人に空中追いかけてここで圧勝してやる！

ウヌワハハハ！我が霸道に後退の二文字はたまにしか消えぬ！……
駄目じゃん！？

……

お腹空いた。

勢いで飛び出したけど良く考えたらご飯に行こうとしてたんじゃな
いか、何で誰も止めなかったのさ！（止めました）
うう……ひもじいよう。

「永占様、ご息女に家督をお譲りになったとは？」

おおっと、ダラダラフラフラしてたらいつの間にか都市の近くまで
来ていたみたいだ。

林の向こうから会話が聞こえる。

片方は渋い声だが覇気を感じられない。

「正気ですか？いくら才があるうとまだ8にも満たぬ子供……潰れ
ますよ？」

ふむふむ、要約すると八歳の御子様面倒な仕事を押し付けたと？

……それはいけないな、子供は風の子だよ？
まあ私には関係無いが。

「そうゆう問題ではないのよ、あの子は成熟し過ぎている。下手をしたら私よりね……あれは異端なのよ、妖怪さんはどう思う？」

この声は……いつぞやのいけすかない女！

ってちがくて、バレてる？何で！？妖気は隠してた！！

「出てこないなら引きずり出すわよ？」

怖い……脚が震えて動けない。

しかも渋い声のオッサンは俺に気付いてるのか此方に的確に殺気を送ってくる。

てゆうか気付いてるね、んで出ていかなかったら殺すと、逃げれる自信？

ハハッ無理無理。

知ってる？殺気の届く距離って確実に殺せる距離に比例するんだよ？
達人どおしの読み合いとかも、殺気を読んでもから出来るんだし、
つまりはあれだよ、ここまで殺気を飛ばせるんなら確実に私をこの
距離で殺せるんだよ。
なんたる理不尽。

「うう……不幸だ」

仕方無くガサガサと茂みから姿を現す。

その瞬間に男はソッポを向き殺気を抑えてくれた。
対する女は白々しく「あら貴女……」とか言ってくる。気付いてた
くせに。

「何だよ……私に何かしたら剣鬼があばれるよ」

他力本願に脅してみる。

だが男は小さく鼻を鳴らし女は「それは怖いわね」とか言いながら
コロコロ笑う。

うう、胃が痛い、空腹とか消えるぐらいに胃が痛い。

「さて、それで貴女はどう思う？大人顔負けの自己評価を行い自らの限界を見極め無理無く行動しながらも確実に結果をだすような子供を」

いきなり何を、と言おうとしたが出来なかった。

進撃に此方を見つめる女の視線が余りにも険しく、そして嘘を許しはしないと云わんばかりに睨み付けていたから。

「……正直に言うと気持ち悪い、驚異だね」

私が怒らないでねえと願いながら口を開けば女性……永占は「……そう」とだけ漏らし顔を俯けた。

うう、罪悪感が！

いけすかない女ではあるんだけど、そんな見るからに落ち込まれると私の人間の部分が出てくるぞ！

「いや、でもさあれだよ？気持ち悪くても不気味でも子供は等しく可愛いよ？」

敵の目の前でオタオタしながら敵を慰める私……道化だね。

でも鬱スイッチは入りません、剣鬼の精神修練の賜物だよ、マジ感謝。あざー。

「ふふつ有り難う……貴女は変わってるのね、妖怪の割には怖くないわ」

そりゃ中身は人間ですから、どこその額刀やら墜落系暴君ヒロイン（笑）とは違いますよ？無力だし。

……泣きたくなってきた。

「どーせ私ゃ弱いよー!!」

心の中で血の涙を流しながら吠えた。

いくら悲しくても眼から血が溢れるとか……なにそれこわひ。

「そう言う事じゃなくて……まあ良いわ、貴女なら問題なさそうだし、娘の話し相手になってくれないかしら？」

は？

何で私が、ってちよっ?!

「意見を聞いておきながら返事を聞く前に連れていこうとするなあ！」

私の首根っ子を掴みズルズル引き摺る女。

覇気の無い男の人は溜め息を溢しながら付いてくる。

いやっ助けれ!

と念じながら睨み付けるが軽くスルー。

疲れた顔が哀愁を醸し出します。がんばってください。

そして私は人間の都市に拉致された。
そこで出会う少女が今後、私にどんな影響を及ぼすかも知らずに。

訓練！家出？……拉致（後書き）

更新が少し遅れました。

今月は土日返上で仕事をしていて細々としか書いていないという。

さて、オリキャラ二人登場

先ずは永占さん、とある原作キャラの御母様らしいですよ。

まあ、解りますよね……武器とか名前とか。

あと寡黙な覇気の無い男性

名前は次回とかに出るかも

能力持ちです

強いです

ちなみに文中で帝姫が殺気について講釈垂れてますが、実際には仕留めれる距離ではなく攻撃の届く距離です。

ただ帝姫は大抵殺気の距離で殺られるので仕留められる距離で覚えちゃってます。

それでは此処まで読んでくださり有り難う御座います。
また次回とかに会いましょう

教育的洗脳計画……暗礁？

……気まずい。

今私の目の前には永占の娘さん（8ちゃん）が居ます。

此方をジーツと観察してくる瞳には年齢一桁とは思えない鋭さと知性の輝きがあるんですが、この八意永琳ちゃんは余程私が気になるのか身を乗り出して来てます。

誰か助けるよ。懇願。

「妖怪？」

ふお！？

いきなり喋らないですよ。

二時間の無言地獄よりは良いけどさ。

「うん、まあ」

と曖昧に答える私。

コミュニケーションレスな私がちゃんと対応出来るわけがない、伊達に二百年独りだったわけではないのだよふふん。寂しい奴だね。

しかし永琳ちゃんはそんな私を気に掛けずに顎に手を添えて何事かを考え込んでしまった。

絵になるし、かなり貫禄ある仕草ではあるのだが、八歳児の仕草とは思えない。せめて可愛らしく小首を傾げて「うむむう」「くらいはほしい所だ。幼女万歳、私は少女だけだ。

「本当に？」

永琳ちゃんは何か疑わしそくに私を見てくる。

いや、まあ妖怪であるのは疑うべくも無く確か何だけどさ、私は永琳ちゃんの質問に思わずドキリとした。

だってさ、私は妖怪であつても自分を薄汚く、爛れた人間であると矛盾ていぎしているわけでさ、それに対して誇りは無くても捨てれない、そんな感情を抱いて過こしている訳さ、それを目の前の幼女はグサリと突き刺さるような程にハッキリと聞いてきたんだ。その意図があつたかどうかは兎角……いや、曖昧な言葉は逃げだよ。

この子は、八意永琳は、それに気付いて聞いてきた。

私の気持ちや、自分が危険になるのも構わず、好奇心を満たすために。

そこで漸く、私は永占の考えが読み取れた。

「そりゃ無いよ、あの女め」

思わず舌打ちをしたくなる。

アイツは私を使って八意永琳に人の有り様を教え込もうとしているのだ。

人の心を植え込もうとしているのだ。

それを妖怪たる私に託すなんて、何て滑稽で無様な考えだろうか……そしてそれを受けようと言う私も、また。

「ん、まあ御察しの通りかな、私は元人間だよ？そして今も、その精神性だけなら人間のままさ」

極々軽く、右手を肩の高さまで持っていきおちやらけた態度で片眼を瞑りながら答える。

私を利用するか、それはすごいと思う。

純粹に人間らしく吐き気を催す程に人間臭くて、私が大好きで愛してて棄てられない人間の有り様で……だから私も利用しよう。

目の前の幼女に教え込もう。

人間らしく大切な者を護るために大切な物を棄てるエゴを。
人間らしく永遠を望む汚らしい本性を。

人間らしく他を見下す顕示欲と他を縛る支配欲を。
だって私は争いが苦手だから。

彼女には人間として、妖怪として……勝ちも負けも存在しない矛盾した終戦の礎になつてもらおう。

私の精神衛生の為にもね

そして私は彼女と過ごすことを快諾してから、仲間にその事を伝える為に一反洞窟へと帰った。

案の定パパ（笑）とオニヤンコタンは反対したりした。

オニヤンコタンに至っては力づくで止めようとしてくるし、家政父は空間を縛り洞窟から出れなくするし。

色々大変だったが、大切にされているという実感から私は少しだけこそばゆく感じた。

「じゃあ、明日からは人間の都市に行くからさ」

私は剣鬼の腕に包まれたまま口を開いた。

墜落暴君系ヒロイン（笑）精華さん改めオニヤンコタンも後ろから私を抱き締めてくれている。

二人とも着物を着崩すからかなりあられも無い格好だ。

剣鬼に至っては額の刀が怖いし。

でも、人肌に包まれて眠るのは大事だよね。

私の暗い部分を知っている剣鬼が私を安心させるためだけに抱き締めてくれるのは……何か、良く解らないけどさ、何か嬉しいし。

オニヤンコタンがそれに便乗するのも苦笑は浮かべても、やっぱり嬉しい。

この二人は家族だと胸を張って言える。

私にはへらと笑いながらもぞもぞと動き、二人の腕の中で丸まった。最後の夜に、会話は無かった。

翌朝。

私は人間の都市中央部に位置する八意邸にいた。

両開きの門は来るものを拒むかのように堅く閉ざされていた為軽く飛び越え。

硝子張りの自動ドアのような扉は中の様子が解らない磨りガラスに……。

昨日も来たけど、人間の発展の仕方が異常に速い。

多分、色んな意味で危うい。

三日で都市の規模が膨れ上がるのはザラだ。

どうやら私は三千年寝過ごした訳ではなく人間が異常らしい。

となると、この先にいる異常な少女もまた……

いや、無駄な思考は止めるべきだね、心に理性を。

「いらつしゃい、待っていたわ」

私が思考に耽っていると、突然背後から話しかけられた。

私にしては珍しく驚く事も無く、冷静に振り返りため息を溢した。

妖艶な声音に、どこか疲れたような辛そうな佇まい、表情はつねに
もれず微笑を張り付けた私の嫌いな阿修羅な男爵様なファッション
センスの、八意永占がそこにいた。

「呼び出しといて門を閉めてるなんて、客人に対しての態度が良いよな」

皮肉を込めながら睨み付ける。

少し漏れ出た妖気で大気が軋む。

この女とは相容れない。

人間らしく人間たる永占は私の敵となりうる。というか敵、確定。

「あら、呼び鈴を鳴らせば開けるわよ」

対して永占はそんな妖気屁でも無いと言いたげに口元に手を当ててコ
ロコロ笑う。

見るものが視れば見惚れるのだろうが、生憎私には不快なだけだった。

「それで？永琳は屋敷の中かな、それとも研究所とやら？」

私は吐き捨てるように言葉を紡ぎ、永占から視線を外した。

だって私の目的は永琳だから、目の前の女の相手をする意味は無いもん。

嫌う理由が無いのは理不尽？知るか、私は人間だから嫌悪に善悪倫理観その他諸々は持ち込まないの、人間ってそうだろ？嫌いだから嫌う。

「あの子は今、学院に言ってるわよ」

「学院……？」

これには正直驚いた。

だってあの異常な幼女が大人しく椅子に座り、同年代の……もしか

したら年上かもしれないが、学生と共に何かを学ぶ姿が想像出来なかったのだ。
ただやはり永琳も女の子、学院で甘い青春を楽しんでると考えると胸がホンワリしてくるね。

「教育者としてね」

しかし永占はそんな私の和みを一瞬で破壊してくれやがりましたですよ。

そりゃそうだろ、だろーよ。

あの永琳が「今日部活出る？」みたいな会話の中に居るのは違和感があるもんな、ああそうだよなあ！やけくそ。

「もうやだあの幼女」

早速心が折れそうになった。

量膝をつき両手で身体を支えながら頂垂れる。

あの幼女の頭脳を残したまま人間らしくさせよう計画はかなり難しいらしい。

……戦争が始まるまでに間に合うのか？これは。

教育的洗脳計画……暗礁？（後書き）

まだまだ人妖大戦は遠い。

帝姫さんは都市に移住した。

すれすが3あがった

いのいたみが2あがった

うつがしんこうした

ネガティブをおぼえた

みたいになりました

人妖大戦までは帝姫と永琳がメイン

その間の剣鬼と精華の動きはたまに書く程度になります。

帝姫さんが剣鬼と精華を説得出来たのは所謂泣き落としとスキル我儘発動のお陰です（笑）

我等が主人公は今回もメンタル弱くて、後ろ向きに停滞します。

前なんか視界にすら入りません。

そんなネガティブに頑張る帝姫さんを今後ともよろしく願います。

ここまでの駄文を読んでくださり、感謝の極みです。あつー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9103x/>

東方停滞録

2011年11月18日00時18分発行